

別冊 写真資料 解説

関ヶ原の戦い（『関ヶ原合戦図屏風』）

解説：静岡大学名誉教授 小和田哲男
写真：関ヶ原町歴史民俗資料館

1600（慶長5）年9月15日、現在の岐阜県関ヶ原町で、徳川家康率いる東軍74,000の軍勢と、石田三成率いる西軍84,000の軍勢が衝突した。「天下分け目の関ヶ原」などといわれる関ヶ原の戦いである。

関ヶ原は、古代、不破の関が置かれ、中山道と北国街道—伊勢街道が交差する交通上の要衝だった。いまでも、東海道本線をはじめ東海道新幹線・名神高速道路などが通っている。石田三成は、東軍を関ヶ原で防ぐ作戦をたて、家康はそれを突破しようと攻撃をはじめた。

軍勢の数ではまさる西軍だったが、^{なんぐう}南宮山の毛利・吉川軍が動かず、また、松尾山に布陣していた小早川秀秋が戦いの途中で東軍に寝返ったため、半日で東軍徳川家康方の勝ちとなった。家康は事前の根回しで、南宮山の毛利・吉川軍が中立を保ち、松尾山の小早川秀秋が寝返ることを確信

し、あえて危険な関ヶ原に出てきて勝利を取めたわけである。

戦いの結果、石田三成・小西行長・安国寺恵瓊らは捕らえられて処刑され、宇喜多秀家は八丈島に流された。西軍に属した87家の所領414万石余が没収され、東軍に属した大名たちに加増され、また、徳川家の直轄地としても組みこまれ、徳川幕藩体制の基礎が作られている。

家康は、関ヶ原の戦いから3年たった1603（慶長8）年、念願の征夷大將軍に任命され、江戸に幕府を開いた。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.27

熊野筆

取材協力：熊野筆事業協同組合
解説・写真：帝国書院

熊野の筆づくりは、約170年前の江戸時代の終わり頃に始まったといわれています。当時、農地の少なかった熊野では、農業だけで生活を支えるのは難しく多くの農民が奈良県などに出稼ぎに出て、筆や墨などを売りながら帰ってきました。そのころ、広島藩の御用筆司や摂津の国有馬（今の兵庫県）で筆づくりを学んだ人々が村人に筆づくりを広め、新しい産業として取り入れたと伝えられています。そのすぐれた技術が、現代まで脈々と伝えられています。

筆づくりは、墨をふくませる穂首づくり、手に持つ軸づくりの工程に大きく分けられ、たくさんの工程を経て1本の筆は完成します。各工程は職人がすべて手作業で行います。1本の筆ができあがるまでに、おおよそ1か月ほどかかります。一人の職人が1か月に1200本前後生産しています。

穂首の材料はおもに馬、鹿、山羊、たぬき、いた

ちなど動物の毛を使っており、中国や北米から輸入しています。用途だけでなく1本の筆の中でも、様々な毛を使い分けています。軸の材料はおもに竹や木ですが、これは岡山県や兵庫県産のほかに、中国や韓国などの海外からも輸入しています。

日本一の筆の生産を支えているのは職人さんたちの確かな技術です。熊野町には「筆司」と呼ばれる技術者がたくさんおり、この中でも19名の筆司が伝統工芸士として活躍しています。

現在、熊野町では毛筆、画筆、化粧筆などがおもに生産されています。生産された筆は国内はもちろんのこと、欧米など海外にも多く輸出され高い評価を得ています。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』p.23~24